

幼児の身体発達と遊び環境の変化

(愛知県T市の'86年と'96年の比較)

穂丸武臣 三井淳蔵* 森美喜夫**

はじめに

幼児の発育・発達を生体の開放システム²⁾として見れば、発育・成達は外界からエネルギーを摂取し、身体の自己組織化を階層的秩序に従いつつ、環境と情報の交換を行いながら知覚-運動行動の組織化過程にある現象として捉えることができる。

すなわち、発育は主として遺伝的プログラムと環境からの栄養摂取と消費の関係、運動能力の成達は環境と運動学習の質と量の関係に依拠して進行する。

身体の成達と環境の関係を論じた研究報告は多い。¹⁾¹⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾ 原田ら⁶⁾は愛知県下の幼児の体格・運動能力調査において1969年と1979年の10年間の比較を行い、10年前に比べて体格と運動能力の平均値の向上が見られたが、内容を吟味すると運動能力の優れた子どもと劣る子どもの両極化の傾向があり、劣っている子に対する保育者の注意を喚起した。

'60年、'70年代は経済成長と工業化に伴う、幼児の生活や遊び環境が急激に変化し、遊び空間の減少、遊び友達の数と質の変化や遊びの内容の変化がもたらされ、身体能力の成達や健康問題に影響を及ぼした。³⁾⁴⁾⁷⁾⁸⁾¹²⁾¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾

それ以後も幼児を取り巻く環境は改善されたとはいいがたい、特に少子化の傾向は今だに進行中であり、合計特殊出生率は1.5人を下回っている。当然、子どもの遊び集団の質の変化がもたらされ、また、幼児を取り巻く遊び環境の変化も進行している。

さらに、'86年と'96年の保育環境の大きな違いは、1989年の幼稚園教育要領と保育所保育指針(以下 保育指針)の改訂である。保育指針改訂による保育の基本は子どもの主体性を尊重した「環境による保育」、「遊びを通しての保育」であり、保育者は環境を構成し、幼児の成達の援助者として位置づけられた。幼児が卒園するまでに育つことが期待されるものとして「心情」、「意欲」、「態度」がねらいとして示された。これらの保育のねらいは非常に抽象的で、ねらいを達成するためには保育者の力量が問われるものであった。

保育園児は1日の生活の内、平均7時間に渡って保育園で生活し、保育者とその環境に大きな影響を受けながら成長する。従って、保育者の意識や保育内容の変化は当然子どもの成達に影響を及ぼす。保育指針の改訂に伴って、幼児の自主的な遊びが豊かに展開される様になったとすれば、当然、身体成達にも良い影響が認められるものと予測された。

* 岐阜大学

** 岐阜聖徳園大学

そこで、保育指針改訂前に行った体格・運動能力と生活環境調査結果と改定後に同一調査を行いその結果を比較検討した。

研究方法

対象；1986年と1996年の対象児は、愛知県T市の保育所10ヶ園の3歳児から6歳児であった。内訳は表1に示した様に'86年は658名、'96年は651名であった。

測定項目及び測定方法は'86年と'96年は同一とし、体格は身長と体重、運動能力は20m走、立ち幅跳び、テニスボール投げであった。測定は各園の保育者が行った。

体格と運動能力の評価は原田⁵⁾の身長と年齢、性を考慮した重回帰評価法を用いて7段階評価を行った。

また、幼児の生活リズムや環境についても'86年のアンケートと同一項目、同一方法で実施し環境の変化との関連について検討した。調査項目の内訳は幼児の生活リズム、生活習慣、遊び環境、生育歴等81項目であり、保護者に記入を依頼した。回収率は'86年、'96年ともに約95%であった。

測定時期；体格・運動能力の測定及び生活環境調査は'86年、'96年とも6月から7月にかけて実施した。

尚、統計的処理は名古屋大学計算機センターのSASを用いた。

表1 測定対象者数と平均月齢

対象者	86年	平均月齢	96年	平均月齢
3歳男	93	41.8±3.34	88	42.7±2.97
3歳女	88	42.7±3.23	91	42.5±2.97
4歳男	112	53.4±3.57	114	53.6±3.69
4歳女	94	53.6±3.31	103	53.6±3.36
5歳男	117	66.3±3.66	98	65.6±3.75
5歳女	97	65.2±3.26	112	66.2±3.84
6歳男	30	72.8±0.87	27	72.7±0.86
6歳女	27	73.1±1.94	18	72.9±0.87
合 計	658	56.1±11.00	651	55.9±10.66

調査結果

1. 体格の発達比較

1) 対象児の月齢比較

'86年と'96年の測定結果は表2に示した。測定時の対象児の平均月齢は3歳児、4歳児、5歳児、6歳児の各年齢群において有意差はなかった。従って、両年とも年齢的にはほぼ同一であり、測定結果の月齢の補正は行わなかった。

表2 幼児の体格・運動能力の'86と'96年の比較

項目	年度	3歳児男子		3歳児女子		4歳児男子		4歳児女子		5歳児男子		5歳児女子		6歳児男子		6歳児女子	
		平均	s d	平均	s d	平均	s d	平均	s d	平均	s d	平均	s d	平均	s d	平均	s d
年齢(月齢)	86	41.88	3.33	42.69	3.22	53.41	3.56	53.56	3.31	66.33	3.66	65.22	3.26	72.80	0.86	73.07	1.93
	96	42.72	2.96	42.46	2.96	53.63	3.69	53.62	3.37	65.63	3.75	66.20	3.84	72.70	0.86	72.90	0.87
身長 (cm)	86	96.32	3.97	95.57	3.74	102.3	4.65	101.9	3.76	109.0	4.82	108.2	4.24	112.7	5.10	111.3	4.70
	96	98.32	3.97	95.79	4.25	101.9	4.36	102.5	4.23	109.2	4.90	109.0	4.65	112.8	3.90	112.0	4.71
評価	86	0.07	1.02	-0.18	0.95	0.00	1.15	0.05	0.93	0.19	1.07	0.20	1.00	0.27	1.33	-0.04	1.19
	96	0.39	1.02	-0.02	1.16	-0.08	1.04	0.17	0.94	0.11	1.08	0.30	1.10	0.25	0.99	0.28	1.07
体重 (kg)	86	14.66	1.54	14.31	1.57	16.52	2.17	16.24	2.08	18.56	2.15	18.09	2.14	20.3	3.40	19.28	2.59
	96	15.26	1.65	14.29	1.81	16.08	2.05	16.23	2.19	18.36	2.57	18.66	3.09	20.0	2.91	20.12	3.61
評価	86	0.17	1.08	-0.06	1.21	0.11	1.17	0.19	1.12	0.39	1.18	0.19	1.00	0.47	1.20	0.33	1.14
	96	0.46	1.08	-0.12	1.13	0.08	1.00	0.26	1.14	0.19	1.08	0.46	1.14	0.33	1.34	0.33	1.28
肥瘦度評価	86	0.09	1.15	0.04	1.05	0.21	0.94	0.09	1.03	0.36	1.01	0.30	0.84	0.60	1.10	0.26	1.26
	96	0.12	1.19	-0.12	1.04	0.17	1.12	0.01	1.20	0.07	1.02	0.27	1.27	0.39	1.19	0.44	1.04
20m走 (sec)	86	7.77	1.41	7.79	1.45	6.14	0.80	6.45	0.79	5.38	0.48	5.62	0.52	5.23	0.28	5.19	0.48
	96	7.30	1.15	7.92	1.40	6.20	0.76	6.51	0.95	5.49	0.72	5.67	0.63	5.13	0.47	5.16	0.38
評価	86	-0.33	1.36	0.01	1.25	0.32	1.02	0.31	1.02	0.37	0.75	0.42	0.91	0.23	0.77	0.89	1.05
	96	-0.10	1.16	-0.11	1.30	0.21	1.05	0.33	1.01	0.13	0.95	0.23	0.90	0.36	1.08	0.72	0.57
立幅跳 (cm)	86	63.77	20.09	60.88	14.62	85.56	15.92	80.51	17.10	108.7	15.45	96.46	13.66	111.4	10.67	104.8	13.40
	96	60.15	18.66	54.70	16.23	81.22	20.22	73.41	19.04	99.3	20.64	93.37	18.41	110.3	25.46	107.2	16.12
評価	86	-0.06	1.36	-0.13	0.99	0.12	1.01	0.28	1.07	0.31	0.92	0.19	0.85	-0.03	0.81	0.41	0.97
	96	-0.36	1.30	-0.44	1.12	-0.19	1.24	-0.15	1.21	-0.37	1.12	-0.07	1.10	-0.21	1.56	0.22	1.11
ボール投げ (m)	86	3.97	1.69	3.17	0.97	5.79	2.63	4.22	1.41	9.05	3.20	4.70	1.79	11.51	4.59	6.69	2.02
	96	4.00	2.12	2.93	2.21	5.08	2.06	3.66	1.09	7.51	2.75	5.06	1.57	10.02	3.72	6.48	2.73
評価	86	0.34	1.24	0.13	0.88	0.12	1.21	0.13	1.13	0.17	0.99	0.20	1.02	0.20	1.49	0.26	0.90
	96	0.02	1.17	-0.30	0.87	-0.26	0.84	-0.24	0.96	-0.27	0.98	-0.27	0.98	0.04	1.27	-0.28	0.96
運動能力 総合評価	86	-0.05	2.97	0.03	2.30	0.44	2.48	0.81	2.27	0.95	2.12	0.80	2.03	0.67	2.72	1.67	1.92
	96	-0.46	2.69	-0.78	2.21	-0.23	2.41	-0.12	2.31	-0.59	2.03	-0.09	2.30	0.13	3.19	0.67	2.09

(* p < 0.05 ** p < 0.01)

2) 体重の発達比較

体重の発達比較は図1に示したように、'86年の平均値より'96年の平均値が上回った性別年齢群は3歳児男子と5歳児女子であった。その他の年齢群では86年の方が100gから500g重かった。統計的に有意差が認められたのは3歳児男子のみであった。従って、体重の平均値は10年間に大きな変化は無かったといえよう。

3) 身長の発達比較

身長の発達比較は図2に示したように、'86年の平均値よりも'96年の平均値が上回った性別年齢群は、3歳児男子と女子、4歳児女子、5歳児男子と女子であった。また、統計的な有意差は3歳児男子のみであった ($p<0.01$)。下回ったのは4歳男子のみであった。従って、身長は10年前に比べてやや高くなっている傾向を示しているが、その差は3歳児で約2cmで最も大きく、その他の年齢群では0.4から0.8cmであった。

4) 肥瘦度の評価比較

身長と体重の発達バランスは重回帰評価で肥瘦度として図3に示した。数値の0は身長と体重の発達の調和が最も良く取れた状態を示している。身長よりも体重が大で肥満傾向はプラスの方向に数値が大となる。身長に比較し体重が小となるのはマイナスの方向に数値が大となる。また、+3は病的な肥大を-3は病的な痩せを示している。

肥瘦度の'86年と'96年の比較で、'96年の方が肥満傾向を示したのは3歳児男子のみで、他の性別年齢群において'86年の方がやや肥満傾向を示した。

従って、図3に示したように'86年に比べて'96年の幼児は身長に対して体重はやや少なく、痩せの傾向を示した。

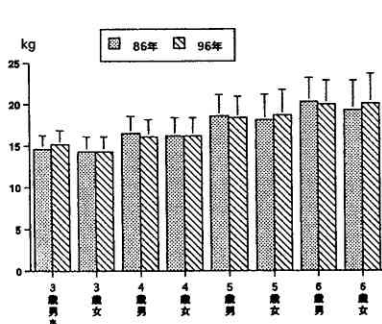


図1 性・年齢別の体重の発達
(86年と96年比較) * $p<0.05$

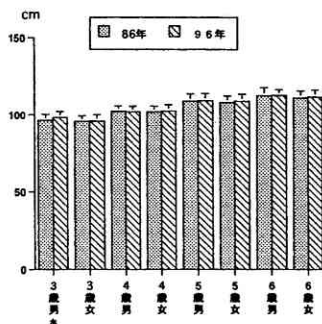


図2 性・年齢別身長
(86年と96年比較) * $p<0.05$

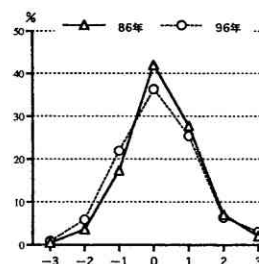


図3 全体の肥瘦度の評価
(86年と96年比較)

2. 運動能力の発達比較

1) 20m走の発達比較

走能力の性・年齢別群比較を図4に示した。'96年の平均値が'86年の平均値よりも向上した性・年齢別群は3歳児男子のみで、他の性・年齢別群は全て'86年の平均値が'96年を上回っていた。しかし、その平均値は0.06secから0.13secで非常に僅少差であった。統計的な有意差は3歳児のみ認められた ($p<0.01$)。

重回帰評価の結果を図5に示した'96年の-1の評価の比率は'86年の比率を約5%上回り、+1の評価は'86年の比率が'96年よりも5%上回っていた。従って、幼児の走能力は86年に比較して、'96年の方が走能力がやや低下しているといえよう。

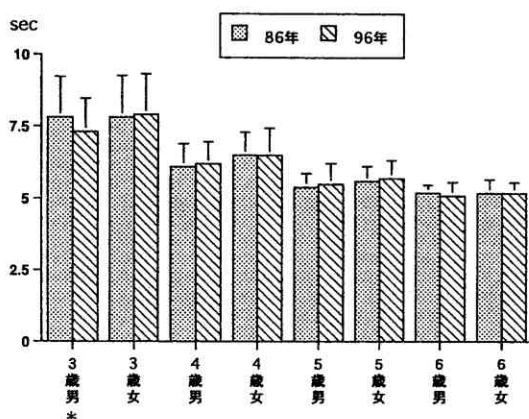


図4 性・年齢別20m走の発達
(86年と96年の比較) * $p<0.05$

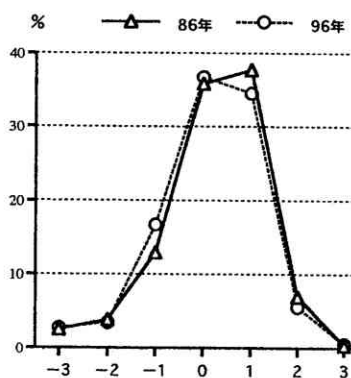


図5 全体の20m走評価
(86年と96年の評価)

2) 立ち幅跳びの発達比較

立ち幅跳びの性・年齢別発達比較を図6に示した。'96年の平均値が'86年の平均値よりも上回っていたのは、6歳児女子のみであった。逆に'86の方が'96年よりも平均値が上回ったのは、3歳児女子で約6cm、4歳児男子は4.3cm、4歳児女子は約7cm、5歳児男子は約10cmであり、統計的にも有意差が認められた。

重回帰評価の結果を図7に示した。'96年の評価は-3, -2, -1の評価で'86年の比率を5%程度上回っていた。'86年は+1の評価で'96年の比率よりも約10%上回っていた。

また、重回帰評価の平均値は、3歳児男子と女子、4歳児の男子と女子、5歳児の男子と女子群においてマイナス評価で、'86年の平均値よりも劣っていた。

従って、立ち幅跳びの能力は明確に'86年よりも'96年の方が劣っていることを示していた。

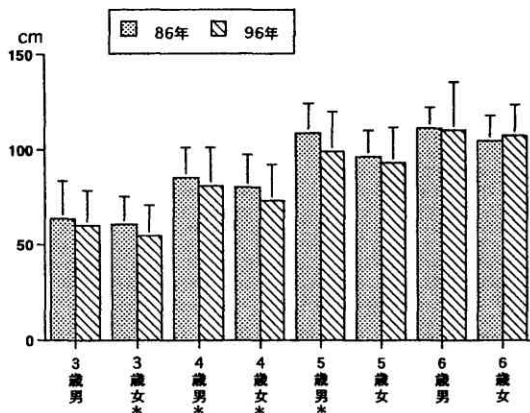


図6 性・年齢別立ち幅跳びの発達
(86年と96年比較) * $p < 0.05$

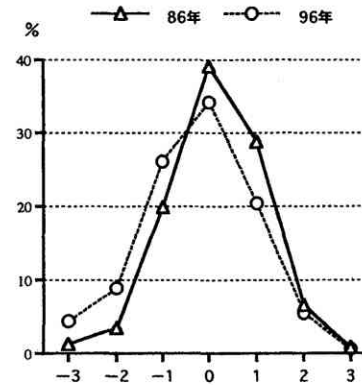


図7 全体の立ち幅とび評価
(86年と96年評価)

3) テニスボール投げの発達比較

テニスボール投げの性別年齢群の発達比較を図8に示した。'86年の平均値よりも'96年の平均値が上回っていたのは、3歳児男子と5歳児女子であった。3歳児女子、4歳児男子、4歳児女子、5歳児男子では'86年の平均値が'96年よりも上回っていた。統計的には4歳男子と女子、5歳児男子において有意差が認められた。

重回帰評価の結果は図9に示した。'96年は'86年に比べて-1の評価で約10%多く、+1、+2、+3の比率は'86年の方が'96年よりも数%高かった。'96年は3歳児男子を除いた全ての年齢群でマイナスの評価であり、4歳児男子と女子、5歳児男子と女子は比率に統計的有意差が認められた。

従って、'86年に比較し'96年のテニスボール投げ能力は劣っているといえよう。

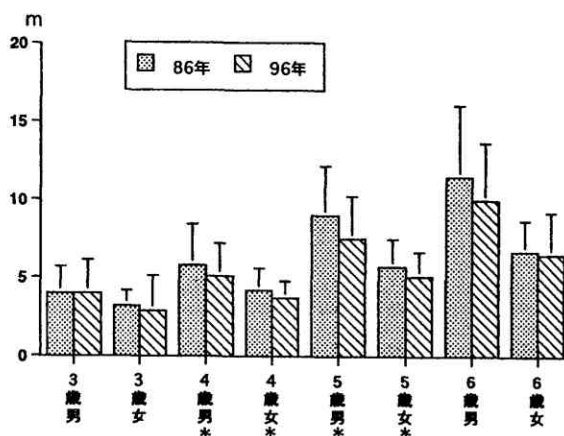


図8 性・年齢別テニスボール投げの発達 (86年と96年比較) * $p < 0.05$

4) 運動能力の総合評価について

運動能力の総合評価は20m走、立ち幅跳び、テニスボール投げの3種目の重回帰評価の総合点の平均点である。その結果は表2に示しているように'86年は3歳児男子が-0.05でもっとも低い評価であったが、他の性・年齢別群の平均値はプラス評価であった。

しかし、'96年の総合評価は全ての性・年齢群においてマイナスの評価であった。また、総合得点の分布は図10に示したように'96年は-2から-5までの評価点で86年の比率を大きく上回っていた。逆に、+1から+5までの評価点では'86年の比率が'96年を大きく上回っていた。

従って、身長と性、年齢の差を考慮した運動能力の発達は'96年の方が'86年よりも明らかに劣っているといえよう。

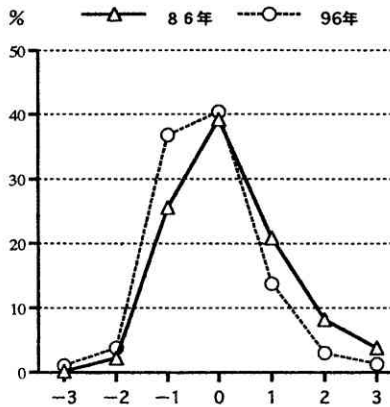


図9 全体のボール投げ評価
(86年と96年評価)

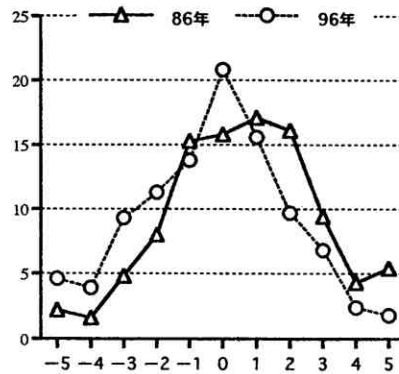


図10 全体の3種目評価総合得点
(86年と96年比較)

3. 幼児の家庭における遊び環境の比較（5歳児について）

’86年に比べて’96年の運動能力が低下した5歳児の家庭における遊び環境要因の変化を空間的環境、人的環境、時間的環境について図11～図18に示した。

1) 遊び場について

幼児の帰宅後の遊び場所は（図11）、遊ぶ比率の高い遊び場の順位は、1位が家の庭先、2位は公園であり、場所の比率順位において10年前と著しい変化はなかった。

遊び場までの距離は（図12）、100m以内にある比率は’86年は約47%であったのに対し、’96年は約28%となり、遊び場までの距離が遠くなっている。

それが原因となって、遊び場までの安全性に対する母親の評価は（図13）、10年前に比較して約10%低下した。それらの総合的な評価となる遊び場に対する母親の満足度も（図14）約15%の減少を示した。

2) 家庭での遊び友達について

遊び友達の数が（図15）、0人と回答したのは’86年が8%であったのに対し’96年は約20%となり、遊び友達がいないとの回答が倍増した。

遊び仲間の質については（図16）一人遊びは、’86年が約5%であったのに対して、’96年は約8%、また、異年齢集団との遊びは’86年が約38%であったが’96年には約24%となり14%低下し、遊び集団の質的变化がはっきりと示された。

3) 降園後の遊び時間について

降園後の遊び時間については（図17）、平日の帰宅後の外遊び時間が2時間以上は’86年が約51%、’96年が約14%となり、外遊びの時間が大幅な減少を見せた。

これに対して、帰宅後の室内遊び時間は（図18）2時間以上が’86年は約13%であったのに対して’96年は約19%に増加し、室内の静的な遊びの増加を示している。

4) 幼児の在園時間について

幼児の運動発達と相関の高かった在園時間は、’86年が7時間11分であったのに対して、’96年は7時間26分で約15分間長くなっていた。これは、幼児の運動能力を高めるために重要な要因である時間的条件が’96年の方が良かったことを示している。

このように、幼児の運動能力に影響を及ぼすと思われる環境要因の内、多くの項目で’96年は悪化していた。

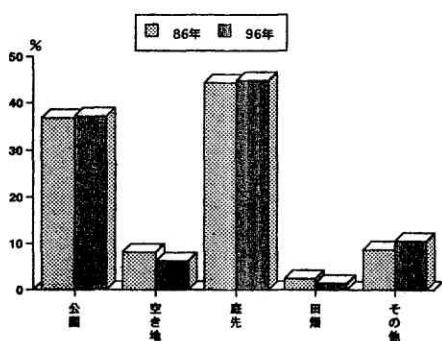


図11 5歳児の外遊びの場所比較

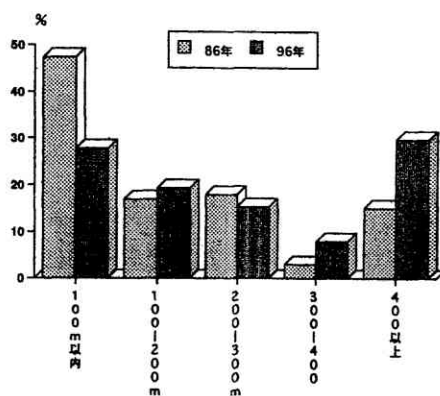


図12 5歳児の遊び場所までの距離比較

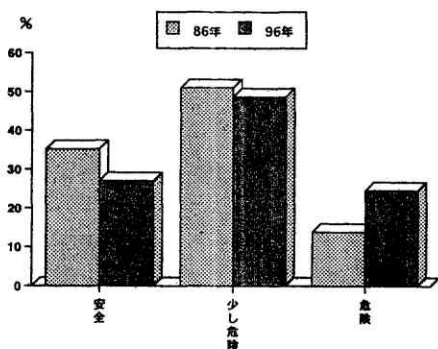


図13 5歳児の遊び場所までの危険度比較

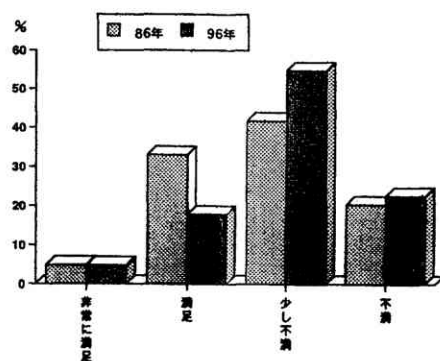


図14 5歳児の遊び場所に対する満足度比較

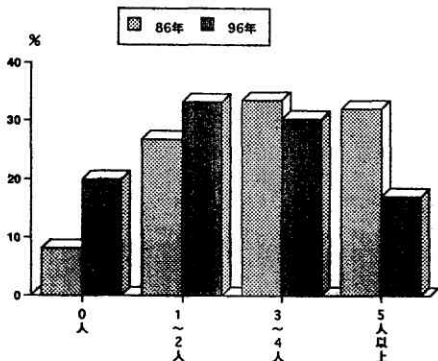


図15 5歳児の友達の数比較

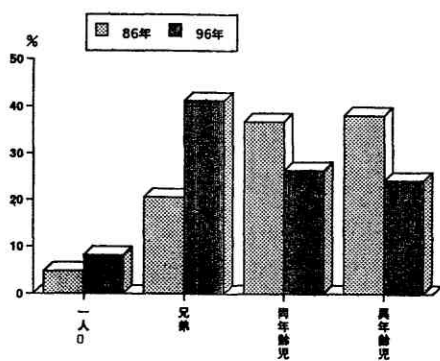


図16 5歳児の遊び仲間の比較

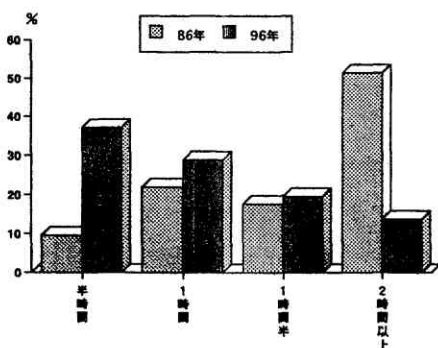


図17 5歳児の降園後の外遊び時間比較

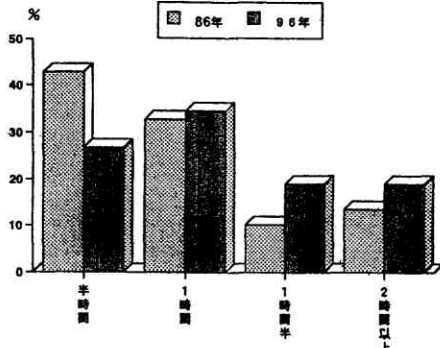


図18 5歳児の降園後の室内遊び時間比較

考 察

幼児の体格と運動能力の横断的な発達比較を同一都市の保育園児を対象に行った。その結果、体格については10年前に比べ体重と身長の平均値に大きな変化は認められなかった。しかし、重回帰評価による身長と体重の肥瘦度ではやや細長型の体型を示した。

運動能力の発達は各年齢群において10年前よりも低下の傾向を示し、特に4歳児と5歳児の低下は統計的にも有意差が認められた。

幼児の家庭での遊び環境も10年前に比較して望ましくない変化が認められた。

定期的な体格と運動能力の測定は身体発達の指標として重要である。それらの指標として測定項目を何にすればよいかは議論のあるところであるが¹⁰⁾、本研究においては先行研究に見られる原田⁶⁾の理論を参考に用いた。すなわち、体格測定の9項目の測定値の内、胸囲、座高、上腕囲、腹囲、腰囲、頭囲、脚長、の因子分析の結果、測定の信頼性や客観性から体重と身長の2項目で約94%が推定できること。また、運動能力の測定では34項目の因子分析の結果から幼児の全能力の約80%が推定でき、種目の妥当性、客観性の視点から20m走、立ち幅跳び、テニスボール投げを選択した。

これらの項目の特徴は20m走は一般的にパワーの測定項目として位置づけられているが、幼児の場合は移動行動における身体操作能力として理解する方が妥当であろう。

立ち幅跳びは脚の筋力測定の指標だけでなく、前方に跳ぶという目標を達成するための腕と脚の協応動作の発達指標という意味をもっている。

また、テニスボール投げも肩と腕の筋力という意味よりも、腰、上体、肩関節、肘関節、手首の関節運動の時系列的円運動と上腕運動と下肢の協応的身体操作運動と位置づけられる。従って、これらの測定項目は成熟と運動学習の結果を示す指標として、また測定方法も非常に客観的で信頼性の高い項目である。これらの、項目の測定結果から幼児の身体発達の傾向をスクリーニングする事は可能と思われる。

従って、これらの運動能力の測定項目で10年間に統計的に著しい低下が認められたことは、子どもの身体発達について憂慮すべき事態が進行していると推定された。

幼児の発育や発達と環境の関わりについて、高田ら¹⁷⁾は幼児の調整力と遊び場所、遊び場までの距離、遊び時間、友達等の条件との相関は有意であるが低かった。

鷹野¹⁸⁾は幼児の運動能力テスト結果から、加齢と共にその成績は友達との関連が高くなる。

また、森下¹⁶⁾は遊び場の志向性で戸外群は運動能力が高く、室内群では体格が大きい値を示したが統計的な差を認めなかった。栗本ら¹¹⁾も同様の報告を行っている。

松浦ら¹³¹⁴⁾は体力の発達と運動習慣の関係において遊び場所、遊び場の種類、時間の条件は必ずしも大きなウェイトをもつものでない。そして「幼児の生活条件はそれぞれ独立でないのが一般的である。すなわち、いくつかの生活条件変量を総合して調整力との関連を検討が必要である。」と述べている。

著者ら⁹⁾が、運動能力上位群と下位群と環境要因の関連について検討した結果では、遊び場の

有無、遊び場の種類、母親の遊び場に対する満足度、降園時刻等と有意差を認めた。しかし、上位群の方が好ましい環境にあるとは限らなかった。

運動能力の上位群が下位群に比べて有効に作用する環境要因として在園時間の長短が関係していると推察した。その理由は、幼児の生活環境として望ましいと思われる。指導者、友達、遊具、安全が備わった環境での生活時間が長い子どもの方が運動能力が上位にあることは納得のいくものであった。

しかし、本研究の対象児の場合、在園時間は'86年に比べて'96年は約15分の延長が認められた。これは、運動能力の向上に優位に作用するはずである。しかし、結果的には在園時間の延長の優位性は測定結果に反映していなかった。それ以外に幼児の運動能力の低下を招く要因が有ったものと思われる。

建築家の仙田²⁰⁾は子どもの遊び環境を立体的にとらえる4つの要素として、1.遊び時間、2.遊び方法、3.遊び集団、4.遊び場をあげ、これらの一つの要素が欠けても子どもの遊びは成立しない、これらの要素の複合的な関係の重要性を強調している。

そこで、T市の幼児の遊び環境の要素を複合的に考察すると、帰宅後の遊び時間は10年前に比べて外遊びの時間が顕著に減少し、帰宅後の遊び友達はほとんどいないし、兄弟の交流も減少している。その結果はもちろん異年齢集団の遊びを壊滅させてしまっている。これは少子化の現象が直接的に影響を与えているものと思われる。幼児の遊び場所は10年前と著しい変化は無かったが、遊び場までの距離は100m以内が10年前に比較し約20%も減少し、400m以上離れている比率が上昇していた。その上、遊び場までの道のりが安全でないという比率が10%も上がっていた。その結果、母親は子どもの遊び場についてフラストレーションを増大させていた。

幼児の遊びが豊に展開されるために、友達の存在は欠かせない、友達との交流を通して楽しさを味わいながら時の経つのも忘れて、遊び込むことが理想であり、一人っ子が、友達を求めて、遊び場へ出かけるためには幼児の行動範囲は100m前後でなければ日常的な遊びは成立しないであろう。ましてや、その途中が危険を感じさせるようでは遊びへの動機づけは低下し、自由な遊びは成立しない。従って、10年前に比較して幼児の遊びを豊かにさせるための条件で、環境改善の要素は全く見当たらず、遊びを実施するシステムの欠陥が生じていると思われ、幼児の身体能力の低下はこれらの環境要因の変化がトータルとして幼児の発達に影響を与えていると解釈された。

上述の家庭での遊び環境の変化に加えて、幼児が1日の生活の中で7時間の長きに渡って生活している保育所の環境は重要である。'90年の保育指針の改訂に伴う保育者の意識の変化が幼児の活動に与えた影響を考察に加えておく必要が有るだろう。

著者ら²⁾が名古屋市立大学人文社会学部の共同研究で'97年に行った名古屋市の保育者380名を対象とした保育指針の改訂についての意識調査によれば、保育指針の言っている説明はわかるが保育実践と結びついていない。また、子どもに育てるものとしてあげられたねらいの「心情」、「意欲」、「態度」が子どもに育てられるようになったという評価をした者は約34%、子どもの心

身の育ちが良くなったと評価した者は約22%、子どもの遊びが豊かになったとの評価は約27%であった。

すなわち、保育指針の改訂によって保育指針の示すような子どもの育ちが達成されていると実感する保育者は少なく、保育の方針や内容に戸惑いが現在も続いていると解釈された。これは名古屋市の保育者に限らず、名古屋市に隣接する研究対象のT市の保母も共通の意識にあることは当然予想される。

子どもの個性や主体性を大切にする必要性は言うまでもないが、幼児期に育てるべき身体能力の発達は幼児の主体的な動きだけにまかせることは不十分である、なぜなら、幼児は遊びを豊かにするための手段や方法が非常に限定されており、保育者の積極的な働きかけがなければ遊びの手段や方法の拡大はしないし、遊びは豊かにならないからである。

もちろん、保育指針はあくまでも指針であって、保育内容を決めていく参考として活用される性質のものであるが、保育者の意識に影響を与えたことも事実であり、これが、幼児の遊びの内容や行動に何らかの影響を与え、身体能力の発達に作用していることは否定できない。

愛知県T市の保育所の場合、'80年代は正木¹²⁾の「乳幼児のからだ調査」報告書の影響を受け、幼児の健康や身体発達問題に取り組んでいたこともあって、保育指針の改訂による保育者の意識の変化が少なからず'96年の調査結果に影響を与えている事も見過ごせない。

幼児の遊び環境要因の内、特定の要素だけが幼児の身体発達に影響を与えるものでなく、要素と要素が相互に作用しながらトータルとして身体の組織化に影響を与えている。

従って、幼児の生活時間の長い家庭と保育所の遊び時間、遊び空間、仲間、遊びの内容と方法それを促す保育者の意識や保育内容等の要素を点検し、健康や発達を目標とした最適システムを創り出していく取り組みが不可欠である。

参考文献

- 1) 丸丸武臣他(1986)： 幼児の遊び環境と運動能力の関連，教育医学，31(4)，6-11
- 2) 丸丸武臣他(1999)： 「保育制度変革にかかる保育者の課題意識に関する実態調査研究」，名古屋市立大学人文社会学部研究紀要，5，223-267
- 3) 藤本浩之輔(1975)： 子どもの遊び空間，日本放送出版協会，48-68，東京。
- 4) 藤田和也(1981)： からだをみつめる，199-249，大修館，東京。
- 5) 原田碩三(1977)： 幼児の体格と運動能力，80-101，北大路書房，京都。
- 6) 原田碩三(1982)： 幼児の体格運動能力の10年間の変化，保育の研究，3，40-47，保育研究所，草土文化。
- 7) 廣島清志(1979)： 人口高密度地域(東京都)における幼児の遊び環境と健康に関する研究「現代のエスプリー子どもの生態学」，102-112，至文堂，東京。
- 8) 上柿和生(1978)： 現代っ子と遊び，体育科教育(1)，11-14，東京。
- 9) 小林寛道他(1990)： 幼児の発達運動学，76-98，ミネルヴァ書房，京都。

- 10) 小林 登、前川喜平、高石昌弘(1993)： 乳幼児発育評価マニュアル 16-27 光文堂 東京.
- 11) 栗本関夫、吉 儀弘、岩波 力(1979)： 調整力“上位群”と“下位群”に分けられた幼児の比較，体育科学，7，106-114，東京.
- 12) 正木健雄(1981)： 日本の子ども・青年のからだの調査「乳幼児のからだ」アンケート報告所，日本体育大学体育研究所所報，6，1-11.
- 13) 松浦義行(1983)： 幼児期における日常の運動習慣の体力発達への貢献度，体育科学，11，117-130.
- 14) 松浦義行、高田典衛、森下はるみ、吉川和利(1978)： 幼児の調整力と生活環境条件との関連，体育科学，6，164-172.
- 15) 森岡幸子、本井康代、原田碩三他(1981)： 幼児の生活と体格・運動能力，教育医学，27(3)，；73-76.
- 16) 森下はるみ(1979)： 幼児期の運動能力の発達に及ぼす内的外的要因の影響，体育科学，7，154-163.
- 17) 高田典衛、松浦義行、近藤充夫、森下はるみ、吉川和利(1977)： 幼児期における調整力の生活との関連からみた構造と発達，体育科学，5，162-182.
- 18) 高野健次、荒木雅信、坂岡与夫(1979)： 調整力フィールドテストの現場の実施とその検討(2)ーテスト成績の高い子供と低い子供の比較ー，体育科学，7，164-172.
- 19) 指定都市教育研究所連盟(1976)： 地域社会における子どもと生活，2-9，東洋館出版，東京.
- 20) 仙田 満(1984)： 子どもの遊び環境，214-233，筑摩書房，東京.
- 21) 浦辺 史(1982)： 幼児の発達，白石書房，東京.
- 22) Von Bertalanffy著 長野 啓、大山邦昌訳(1978)： 一般システム理論，36-38，みすず書房，東京.